

中将君の問題

——浮舟の運命との関連において——

篠原義彦

(一)

「宿木」の巻末尾で薫に浮舟の姿を垣間見させた作者は、続く「東屋」の巻で常陸介の娘としての浮舟に焦点をしばって筆を進めることになる。「宿木」の巻まで読み進んで来た読者は、物語を浮舟という女性を中心に展開することが宇治十帖の袋小路的語りでの打開のために不可欠であることを知りつつも、物語の「場」の下降の異様さには驚嘆させられよう。「宿木」における、饒舌の弁の尼の「かの母君に、おぼしめしたるさまはほめかし侍りしかば」(日本古典全書「源氏物語」宿木⑥―二三〇、以下同書より引用)という語りを受けて、「東屋」でも「かの尼君の許よりぞ、母北の方に、のたまひしさまなど、たびたびほめかしおこせけれど」(⑥―二三二)という記述があり、弁の尼と浮舟の母中将君との間に薫の浮舟所望ということについての情報交換がしばしば存在した

ことが指摘されているが、浮舟登場ということ自体が作者のいわば予測せざる変改・転進であっただけに、その母中将君と弁の尼との連繫も甚だあわてふためた感じがする。ところで、ここで重要なことは弁に語った薫の意向である。薫が浮舟という大君・中君の異母妹の存在を知ようになったのは、「かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔覚ゆる人形をもつくり、絵にも画きとりて、行ひ侍らむとなむ、思う給へなりたる」(宿木⑥―一九三)と殊勝らしく語りつつも、「几帳の下より手をとらふれば」(宿木⑥―一九三)という行為に出る薫の横恋慕に困惑した中君の賢明なる措置からであった。そして、中君から浮舟についておおよそのことを聞いた薫の心情は弁の尼に対して極めて明瞭に語られている。すなわち、中君に続いて今度は弁の尼から詳しく浮舟の素姓を引き出した薫は、「昔の御けはひに、かけても触れたらむ人は、知らぬ国までも尋ね知らまほしき心あるを、

かずまへ給はざりけれど、近き人にこそあなれ。わざとはなくとも、このわたりに音なふ折あらむついでに、かくなむ言ひし、と伝へ給へ」(宿木⑥―二〇三)と本心を明らかにしている。この薫のことばには「昔の御けはひ」にどこまでもかかずらう彼の発想の基本的様式をうかがいうるとともに、浮舟処遇についての重要な姿勢というものが明確に示されている。すなわち、浮舟は大君の「ゆかり」の女であって、そこに浮舟という女の存在意義があるし、そして、ただそれだけでしかありえない。大君の「けはひ」に似ている人、「ゆかり」の人として注目されるのであって、浮舟が大君とのゆかりのない存在であるとしたら、薫の所望の対象とはなりえないことは自明のことである。浮舟にとってよるべとなりうるのは大君の異母妹というゆかりであって、しかもそれだけでしかない。大君を偲ぶために浮舟は必要であった。その意味において、正しく浮舟は大君の「人形」であった。このことに思いを至す時、先に触れた「のたまひしさまなど、たびたびほめかしおこせけれど」という指摘は見のがしえない。八宮・大君在世当時から宇治に仕えている弁の尼だから薫の発想のくせは熟知しているし、浮舟についての薫の意向も充分知っている筈だから、「のたまひしさま」を受けて母中将君に伝えたのだろうが、中将君はそれをどう理解し、そしてどのように対処しようとしたのか。中将君の理解・反応については「東屋」冒頭に「まめやかに御心とまるべきことも思はねば、たださまでもたづね知り給ふらむこと、とばかり、をかしう思ひて、

人の御程のただ今世にあり難げなるをも、数ならましかば、などぞ、よろづに思ひける」(⑥―二三二)と描かれている。すなわち、中将君は④薫が本気で所望しているとは思わなかったが、⑤それほどまで浮舟を探しあてようとするのを興味深く思い、⑥薫の身分が稀有なものであるにつけてもこちらの身分が人並であったらと残念に思った、ということになる。ここには薫の申し出に対する理解の不充分が見られる。すなわち、薫は故大君の「人形」という点において浮舟を求めているのであり、その意味では薫は「まめやかに」執心しているのであり、それを④↓⑤のごとく中将君が理解し、反応するのであれば、そこには重大な齟齬が隠されている。極言すれば④の「数ならましかば」という嘆息は不必要であった。何故なら薫にとつて問題なのは我が身と釣合う身分ではなく、大君との「ゆかり」だけが問題であったのだから。ところが、中将君は「数ならましかば」と慨嘆している。この母の慨嘆は、裏返せば④⑤に内包されている薫の申し出に対する理解が、「人形」としての浮舟から浮舟その人へと、どこかですりかえられる可能性があることを雄弁に物語っている。中将君の慨嘆は意味するところが深い。

中将君の嘆息は、左近少将との縁談という新たな事態に逢着する

ことよって痛烈なまでに深いものとなる。浮舟は故八宮の認知しない、いわゆる庶子である。常陸介には先妻の遺児があり、また中将君との間にも子どもがいる。そのような状況の中で、介の「他人と思ひ隔てたる心」(東屋⑥―二三三)を腹立たしく思う母中将君は、どうかして浮舟に良縁をと思ひ続けている。そして、先妻腹の姫君を縁づけ、今、中将君にとって浮舟の良縁は、夫の「思ひ隔てたる心」への復讐という意味においても絶好の切り札であった。この指摘に続いて、作者は常陸介の成り上り者の生活を諧謔を交えつつ描き出している。それは、任満ちて帰京したとはいえ、「東の方の、遙かなる世界」(東屋⑥―二三三)そのものであり、貴顕・華麗とは隔絶したものである。中将君は、今正しくそういう世界、愛領の世界の住人である。中将君と浮舟という母娘の住んでいる世界は、「数ならましかば」という反事実の仮想の存在しうる世界である。しかも、そういう場にながらも、中将君はその場になじもうとはしない。かえってそういう世界を嫌悪し、反撥し、そして、浮舟の縁談ということを契機に復讐しようとしてしまっている。この事實は無視しえない。

そういう中将君、娘の将来のみをよるべとする、いわば母性の権化とでもいべき中将の君の前に現われたのが左近少将という人物であった。左近少将に対して中将君は、「この君は人柄もめやすくなり、心定りて物思ひ知りぬべかなるを、人もあてなりや、これよりまさりて、ことごとしき際の人はた、かかるあたりを、さいへどな。あはれにはたきこえ給ふなり。御宿世にまかせて、おぼし奇りねかし」(東屋⑥―二四六)と薫に言及するのも当然である。ところが、この乳母の浮舟処遇についての勧めに対して、母中将君は極めて歴然たる解答をしていて、誤解の余地もない。少し長くはなるが引用してみよう。

あなおそろしや。人の言ふを聞けば、年ごろおぼろげならむ人を見、とのたまひて、右の大殿、按察使の大納言、式部卿の宮などの、いとねんごろにはめかし給ひけれど、聞きすぐして、帝の御かしづき女を得給へる、君は、いかばかりの人をか、まめやかに思さむ。かの母宮などの御方にあらせて、時々も見む、とおぼしもしなむ、それはたげにめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。宮の上の、かくさいはひと申すなれど、物おもはしげにおぼしたるを見れば、いかにいかに、二心なからむ人のみこそ、めやすきたのもしきことにはあらめ。わが身にては知りなき。故宮の御ありさまは、いと情々しく、めでたくをかしおほせしかど、人数にもおぼさざりしかば、いかにばかりかは心憂くつらかりし。このいといふかひなく、情なく、さまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年ごろをもすぐしつるなり。折節の心ばへの、かやうに愛敬なく用意なきことこそにくけれ、歎かしくうらめしきこともなく、かたみにうちいさかひても、心に合はぬことをばあきらめつ。上達部親王達にて、みやびかに心はづかしき人の御あたりと

尋ね寄らじ」(東屋⑥―二三四)と思ひ、娘との婚儀の準備に奔走する。ところが、浮舟が常陸介の実子ではなく、中将君の連れ子であることを知った左近少将は浮舟との縁談を破棄し、常陸介の実子と結ばれることを希う。その際、媒人に語った左近少将のことに注目する必要がある。「わが本意は、かの守の主の、人がらものものしく、おとなしき人なれば、後見にもせまほしう、見るところありて思ひはじめしことなり」(東屋⑥―二三八)ということばの何とあさましいことか。少将の極めて単純にして明解な物欲中心の発想と、浮舟の母が少将に対して抱いた好意的な印象との落差は致命的であった。中将君は左近少将の深層を看破することができず、ただ自己の映像によって愛嬢浮舟を徒に振り回していたにすぎなかった。傷心の母娘の目前で、常陸介の実子と左近少将との婚儀の用意は進められる。ここに母中将君の重大な錯誤があった。

(三)

左近少将の心変わり——とはいふものの少将自身は何ら変っていない、心変わりという把握は中将君の立場から見ることにはすぎない——に憤慨した中将君が「いかでこならぬ所に、しばしありにしがな」(東屋⑥―二四六)と思うのは無理もないことであろう。また、そのような中将君を慰めようと、乳母が「大将殿の御様容貌の、ほのかに見たてまつりに、さも命延ぶる心地のし侍りしか

いふとも、わが数ならではかひあらじ、よろづのことわが身からなりけり、と思へば、よろづに悲しうこそ見たてまつれ。いかにして、人わらへならずしたてまつらむ」(東屋⑥―二四七)

ここに見られる中将君の主張を要約してみると、①貴顕の人の娘との結婚話も聞き入れず、帝の寵愛深い姫を得た薫が身分の低い女性を本気で愛する筈がない、②若しも身分の低い女性に対して、薫が心を動かすようなことがあるなら、それは母宮付きの侍女として処遇し、たまさかの慰みものにするつもりであろうが、それは女にとってはいふことだ、③その証拠に、匂宮の妻となった中君でさえ、世間では幸い人とはいふものの、物思ひは尽きない、④それを見てみると、夫として選ぶには、二心のない男性が一番である、⑤たとえ相手が上達部や親王というような高貴な男性であっても、身分が不釣り合いではどうしようもない、ということになる。しかも、これらの主張が中将君自身の苦汁に充ちた過去の体験に裏打ちされているゆえに迫力がある。「東屋」の冒頭で「数ならましかば」と嘆いていた中将君には背延びしようとする姿勢があったが、ここに描かれている彼女には、自分が今所属する「場」というものにしっかりと脚を踏まえた、地下の力強ささえある。そして、わが身のかつての体験から、情深く立派であったが、物の数にも扱ってくれなかった故八宮よりも、浅慮で細かな心づかいのない常陸介の「二心なき」方が、夫としてはよいことを宣言している。「数ならではかひあらじ」と、身分不相応な結婚というものを、女として強

く戒めている。それは彼女の苦々しい体験から滲み出た貴重な賜物であった筈である。——ところが、この中将君の価値ある結論はあえなく瓦解し去る時が来る。

浮舟の居所に困り果てた中将君の脳裡には中君の姿が浮かんだ。彼女は中君の許に手紙を書く。「いと忍びてさぶらひぬべき隠の方さぶらはば、いともいともうれしくなむ」(東屋⑥―二四九)という嘆願は居たたまれなくなった浮舟母娘の心情と立場をよくあらわしている。そして、これ以後、浮舟は離離の身となるのだが、それは母娘には知る由もないことであった。中将君は浮舟を伴ない中君邸に赴き、逗留することになる。そういう中将君に対して、作者は二度にわたって匂宮中君夫妻の生活を覗見させている。すなわち、若君の世話をしている中君を見て、「われも故北の方には離れたてまつるべき人かは」(東屋⑥―二五二)とみごとな先祖がえりをやっていた中將君は、中君の許に匂宮が来たのを知って、「ゆかしくて物のはざまより」(東屋⑥―二五二)覗見た。そこには、彼女が属する「場」とは比べものにならない、もう一つの世界が存在していた。「いときよらに、桜を折りたる様し給ひて、わがたのもし人に思ひて、うらめしけれど、心には違はじと思ふ常陸の守より、様容貌も人の程も、こよなく見ゆる五位四位ども、あひひざまづき侍ひて、この事かの事と、あたりあたりの事ども、家司どもなど申す。また若やかなる五位ども、顔も知らぬども多かり」(東屋⑥―二五二)という有様で、わが夫よりも、容姿・出自ともに優れる

日陰者としての苦汁を忘れ、「場」を離脱した中将君のこれからの進路は他にはない。それは一步でも貴顕・華麗の世界へ歩を進めることであり、そのことによって、我が身の過ぎ去りし日々の傷心の痕跡を癒すことであった。そういう彼女が中君に対して、「かの過ぎにし御かはりに尋ねて見む、と、この数ならぬ人をさへなむ、かの弁の尼君にはのたまひける。さもや、と思ふ給へ寄るべきことには侍らねど、一本ゆゑにこそは、と、かたじけなけれど、あはれになむ思ふ給へらるる御心深さなる」(東屋⑥―二五六)と薫を讚嘆し、紫のひともとなつながらわが娘を前面に押し出し、中君の媒を懇願するのは当然であろう。そして、中君を訪れた薫の「なまめかしうあてにきよげなる」(東屋⑥―二五七)姿を見た中将君には制御の歯止めはなかった。薫の美しさを口々に讚美する侍女たちのやりとりを「すずろに笑みて聞き居たり」(東屋⑥―二六三)という彼女の姿には生理的な嫌悪感さえ感じられるほどグロテスクである。そして、かつて乳母に語った聡明な帰結を捨て去った彼女は、「見し人のかたしるならば身にそへて恋しき瀬々のなでものにせむ」(東屋⑥―二六一)という薫の思念の流れには全く無頓着に、浮舟を薫に収斂させることに執着してしまう。中将君が乳母に話した結婚観は貴重な結論であった。その結論が、匂宮邸における覗見によってあえなく崩れ去った。そこに見た中君の華麗にして豪奢な生活も、かつて彼女が乳母に語ったとおりの、決して安定したものではなかった。累卵の危うさにも似たものであるにもかかわらず、中

五位四位の者でさえ伺候せしめている匂宮の姿は鮮烈であったし、内裏からの使者として参上した継子の「御あたりにもえ近く参らず」(東屋⑥―二五二)という姿はそれに追い打ちをかけた。そして、その翌朝の再度の覗見は、中将君に決定的におのれの属する「場」と匂宮・中君の属する「場」との位相の差異を認識させた。すなわち、匂宮邸に控える供人の中に、浮舟を捨てた左近少將の見栄えのしない姿を見、しかも、匂宮邸の侍女たちの軽侮のこもった噂が彼女の耳に入る時、中将君はあれ程までに情熱をこめて乳母に語った自己の主張を忘却して、おのれの「場」から昇華してしまふ。「この御ありさま容貌を見れば、織女ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな」(東屋⑥―二五三)と鮮やかな交心ぶりを見せる彼女は、「なほ今よりのちも心は高くつかふべかりけり」(東屋⑥―二五四)と自信のほどを見せている。ここには乳母に語ったあの結婚観はその片鱗さえも姿を残していない。中将君は辛苦の中でわが掌中のものとなしえた賜をこれほどあっさり捨て去ってよかったのか。今の「場」を忘れ、故八宮の北方の姪という、か細い「ゆかり」の糸に、わが娘浮舟の運命を結びつけ、先祖がえりを果たそうとする中将君の転進ぶりはみごとであるとともに、その健気な母性は哀れでもある。そこには、日陰者として過して来た女人の必死の昇華がある。その意味において、「少將をめやすき程と思ひける心もくちをしく」(東屋⑥―二五四)思うのも無理はない。

將君は、二度にわたる覗見において眼前に現出した一幅の絵に酔い痴れた。そこには、幸少なく日を送って来た女の、栄華と権勢への歪な執念が見られる。わが身が果しえなかった女の夢を娘にかなえさせたいと中将君が思ったのも無理もなかったが、それは危険な賭でもあった。この盲目的な賭が浮舟を宇治川の岸辺に立たせることになるうとは中将君は予測もしなかった。そして、乳母に語ったあの結論が瞬時にして崩壊するところにこそ、中将君自身の不安定さが具象化されていた。

四

中君に浮舟のことを頼んで帰邸しようとする中将君の車を、内裏から帰った匂宮が見とがめるところから、浮舟の困惑と彷徨のドラマは加速を増す。作者は浮舟の運命に焦点を当てて筆を進めて行く。洗髪中とも知らず中君の部屋を訪れた匂宮は、そこで浮舟を発見し、直接行動へと常に直結する匂宮は、「衣の裾をとらへ給ひて、こなたの障子は引きたて給ひて、屏風の間居給ひぬ」(東屋⑥―二六七)という有様で、危機一髪にまで事は及ぶのだが、内裏からの明石中宮御惱の報せによって浮舟は虎口を逃れることができた。乳母の報告で、浮舟を引き取った母は、三条の小家に娘を隠れ住まわせる。彼女は浮舟の身の置き場に困惑しつつ、「この御ゆかりは、心憂しと思ひきこえたりしあたりを、睡びきこゆるに、びん

なきことをも出で来なば、いと人わらへなるべし」(東屋⑥—二八〇)と宇治のゆかりの苦々しい昔日を想い起しつつも、左近少将の「宮城野の小萩がもとを知らませばつゆもころをわかずぞあらまし」(東屋⑥—二八三)という、浮舟の血筋を知らなかった迂濶を悔いた恥知らずな返歌を手につけても、再びどうかして人並な結婚をさせたいものだと思う。そして、「あいなう大将殿の御さま容貌ぞ、恋しう面影に見ゆる」(東屋⑥—二八三)という状態で、左近少将を見ることによつて、再び貴頭へと押し上げられ、薫を理想像とし、「若き人はまして、かくや思ひ出できこえ給ふらむ」(東屋⑥—二八三)と、浮舟は自分以上に薫を慕っているだろうと勝手な想像をめぐらしている。

ところで、これまでの物語の流れの中で、浮舟の心情に対して作者はどれだけ筆を割いて来たのか。浮舟はここに至るまで常に黙っていた。自分の胸中をあらわにすることはなかった。そのように作者は取り扱って来た。いわば母中将君の一人舞台であった。その意味において、浮舟と中将君は一心同体であったし、それでよかった。ところが、母中将君の薫への思いを描き、「若き人はまして」と浮舟の心情を忖度した記述に続いて、全く唐突にも浮舟の心の深奥が物語の表面に引き出されることになる。三条の仮住まいの荒廃した前栽をながめつつ日を送る浮舟は、「あやにくだち給へりし人の御けはひも、さすがに思ひ出でられて、何ごとにかありけむ、いと多くあはれげにのたまひしかな、名残をかきかりし御移香も、ま

だ残りたる心地して、恐しかりしも思ひ出でらる」(東屋⑥—二八四)と、強引に迫まって来た匂宮の姿を想い出している。浮舟の思念の流れはその根幹において官能的である。この浮舟の心情と母中将君の勝手な忖度との間の亀裂は深い。ここにも中将君の過失の序曲が見られる。

一方、薫は舟の尼の案内で夜雨の中、陋巷の隠れ家に浮舟を訪れ、宇治の里に連れ行き、そこに住まわせることになるが、悠長な薫は「たとしへなくのどかに思ひ控えて、待ち違なりと思ふらむ」と、心苦しうのみ思ひ給ひやり」(浮舟⑦—一四)ながらも、「山里のなぐさめと、思ひ控てし心あるを、すこし日教も経ぬべき事ども作り出でて、のどやかに行きても見む、さて、しばしは人の知るまじき住みどころして、やうやうさるかたに、かの心をものどめ置き、わがためにも、人のもどきあるまじく、なのめてこそよからめ、にはかに、何人ぞ、いつより、など聞きとがめられむものさわがしく、はじめの心にたがふべし、また宮の御方の聞き思さむことも、もとのところを際々しう率て離れ、昔を忘れ顔ならむ、いと本意なし」(浮舟⑦—一四)と、我が身のほど、世間の耳目、中君の思うところを憚り、浮舟を空しく放置してしまう。正月の鬢籠を届けた新参の童の失敗から、浮舟が宇治の里に匿われていることを察知した匂宮は、薫を装って浮舟に近づき、思いを遂げてしまう。「女、いとさまよう心にくき人を思ひならひたるに、時の間も見ざらむは、死ぬべし、と思しこがるる人を、こころざし深しとは、か

かるを言ふにやあらむ、と思ひ知らるる」(浮舟⑦—一三三)という描写には、優柔不断な薫を去って、直情径行の匂宮へと傾斜する浮舟の心理が巧みに表現されているし、久方ぶりに宇治を訪れた薫の前に、干々に思い乱れる浮舟は、理性と感性との相剋の中で、どうしても匂宮を忘れえない。そういう中で、宇治を訪れた母中将君は、乳母と舟の尼の極めて皮相的な報告に耳を傾けるだけで、決して浮舟の胸中を深く探ろうとはしない。そして、「帝の御女をもち

たてまつり給へる人なれど、よそよそにて、あしくも、あらむは、いかがはせむ、と、おほけなく思ひなし侍る」(浮舟⑦—一六三)と、いわば日陰者でもよいと、薫の愛を受けいれることを希う。この中将君には、かつて乳母に語った、女性の幸福についての主張の形骸さえ残っていない。まことに鮮明な変心ぶりではある。「二心なき」男こそ、夫として最上のものだと大見得を切った中将君はもうここには存在しない。匂宮との間に過失が起きることを心配して、「すべて、身には悲しくいみじと思ひきこゆとも、また見たてまじうらむらまし」(浮舟⑦—一六四)と諫めているが、これこそ浮舟の心情に一步も踏み込もうとしない中将君の一人相撲である。中将君は浮舟の変貌を知らない。匂宮と薫という全く対照的な二人の男性に挟まれて、その中で二者択一を迫られる中において、自己というものを見つめて辛吟している浮舟を、かつて左近少将との破談の中でも従順に母の意のままに動いた浮舟と同じ存在であるとしか

(五)

思っていない。浮舟を包む状況も、そして、浮舟の心も交わってしま

浮舟という女性はいわば母中将君の意のままに振り回されている。浮舟という、源氏物語最末尾の女主人公は、中将君という演出者の思いのままに舞台の上で踊らされている。しかも、その演出家である母中将君は決して洞察力のある聡明な女性ではなかった。中将君の行動は常に誤解と錯誤と軽率の帰趨であった。そういう脆弱な基盤の上で、彼女は、日陰者としての自己の苦い体験からの帰結を捨て去って、かつて自分を追放した貴頭の世界に必死にしがみつこうと、かといってわが娘の将来を夢みようとした。その点で、浮舟の運命の軌跡を追う過程において、母中将君の心情の動きは重要であろう。中将君の心情を貫いている発想の基本は①日陰者として扱われた敗者意識と、②貴頭との同族意識、であろう。彼女は故八宮の北の方の姪である。その意味では、貴頭との「ゆかり」はあるし、彼女がそれを主張し、たまにはそれを楯に取るのも根柢のないことではない。しかし、今彼女の属する世界は、常陸守の北の方としての世界である。都の貴頭・権勢とは異なる、受領の世界である。い

わば、中将君は二足の草鞋を穿かされている。しかも、彼女は今の「場」を軽侮し、そして、その「場」から脱出遁走し、貴顕へと昇華しようとする。そのために浮舟はまたとない切り札であった。浮舟とともにかつて八宮によって峻烈に拒絶され、追放された「場」に、浮舟を先陣にもう一度回帰しようとしている。その意味において、彼女は「ゆかり」を主張し、先祖がえりにすべてを賭けるのだが、そこには、中将君の本質的な矛盾撞着の「生」が見られる。そういう「生」から、さまざまな誤解や錯誤が生まれ、その上に浮舟は造型された。浮舟の「生」が漂泊に翻弄されたのも無理はない。しかも、その浮舟が最も重要な時点において、おのれを選んだのだから悲劇は深かった。——中将君という、いわば脇役とおおぼしき人物によって、浮舟という源氏物語終焉の女主人公の慟哭の運命を、思うままに作り出した作者の筆は余りにも巧みであったといえる。

(高知県立高知小津高等学校教諭)